

宣長における文学論の生成 序説

—その形成過程について—

岩 田 隆

INTRODUCTION TO NORINAGA'S DOCTRINE OF LITERATURE

—HIS STATURE AS CRITIC—

Takashi IWATA

It is a well-known fact that since Tokugawa period Motoori Norinaga (1730—1801) has been looked upon as a supreme authority on the study of classical literary works in Japan. It is needless to say, moreover, that his treatise on that *sense of pathos* (mono no aware) which is regarded as the shaping spirit of his literature is an epoch-making achievement in the history of Japan's critical literature.

The idea contained in his doctrine, however, has not been fully revealed, though a number of scholars are endeavouring to approach to the core of his thought from their own points of view. One of the reasons for their difficulties to find his true thought is, in my mind, that they have not yet touched what lurks in his literary background.

As it is, I cannot but deal with the way he established his glorious accomplishment in Japan's literature and, in my small essay, for the purpose of grasping what Norinaga truly meant, I concentrate my attention on his stature as an eminent critic, expecting my study to be a stepping stone to the actual appreciation of his literature. I intend to trace as positively as possible his literary career to his *Synopsis of Murasaki Shikibu's Genji Monogatari* (Shibun Yōryō). I aim at bringing to light the relations of his life to his literary theories.

I shall be overjoyed, should this essay prove instructive and inspiring for those who are concerned with the greatest thought of Norinaga's. This is why I present you a piece of my work entitled "*Introduction*".

I 緒 言

本居宣長の「もののはれ論」は、儒学特に朱子学に政治理念を求めた徳川幕藩体制下において、動もすれば文学がその政治的・道徳的制約の下に恰も隷属的存在として位置づけられていた時代に、文学にはそれ独自の領域が儼として存在していることを論証したという点で、日本文学評論史上不滅の業績と云うべきであろう。即ち、和辻哲郎博士は、

「もののはれ」を文芸の本意として力説したのは、本居宣長の功績の一つである。彼は平安朝の文芸、特に源氏物語の理解によって、この思想に到達した。文芸は道徳的教誡を目的とするものでない、また深遠なる哲理を説くものでもない、功利的な手段としてはそれは何の役にも立たぬ、たと「もののはれ」をうつ

せばその能事は終るのである、しかしそこに文芸の独立があり価値がある。このことを儒教全盛の時代に、即ち文芸を道徳と政治の手段として以上に価値づけなかった時代に、力強く彼が主張したことは、日本思想史上の劃期的な出来事と云はなくてはならぬ。^(註1)

と、広く思想史的立場からその卓越せる意義を称揚し、以下「もののはれ論」そのものについて検討批判の筆を進めておられるのである。勿論、この「もののはれ論」が提示する意義は如上の点に尽きるわけではなく、複雑な課題を内包しながら、苟も日本文学を理論的に考究する場合、必ず取り上げらるべき言わば「文学論の古典」として、今日なおその生命を失っておらぬことは言うまでもない。

ところで、この「もののはれ論」とは、具体的に宣

長の何れの著作を指すとすべきであろうか。それについては論者によって多少の差違は存するものの、やはり「源氏物語玉の小櫛」（九巻）の総論である巻一・巻二の「大むね・なほおほむね」とするのが妥当であろう。即ちこの「玉の小櫛」は、他の稿本類とは異なり、宣長が生前親しく自らの手で刊行したという点で、正しく精撰本と目せられるからである。（なお、此書の刊刻は宣長の歿する前年の寛政十一年であり、「鈴屋翁略年譜補正」^(註2)によれば寛政八年に板下の浄書を始めているのであるが、その起稿の時期については遙かに遡って安永八年頃とも考えうる資料^(註3)が存するのであって、此書の成立事情には未だ究明すべき余地がある。）

ところが周知の如く此書の総論（「玉の小櫛」巻一・巻二）は、宣長の壮年時代の著である稿本「紫文要領」（宝暦十三年六月成）上下二巻の補訂と考えられ、若干の項目と辞句の異同を除けば、両者の論旨は全く同一なのである。とすれば、宣長の輝しい文芸論的達成である「ものあはれ論」は、この「紫文要領」において成立したと見て何等差支えないのである。なお、この「紫文要領」とほぼ時を同じくして成立した歌論書「石上私淑言」二巻（或は稿本巻三を含めて全三巻）も、この「ものあはれ論」的立場を繰説展開しているのである。

宣長が自らの発明に係るこの文学論に対して如何に自信を有していたかは、次に掲げる「紫文要領」下巻末尾に記した識語が最も雄弁にそれを物語っている。

右紫文要領上下二巻はとしころ丸か心に思ひよりて此物語をくりかへし心をひそめてよみつゝかむかへいたせる所にして全く師伝のおもむきにあらず又諸抄の説と雲泥の相違也見む人あやしむ事なかれよくよく心をつけて物語の本意をあらはし此草子とひき合せかむがへて丸がいふ所の是非をきたむへし必人をもて言をつる事なかれかつ又文章かきまはなはたみたり也草稿なる故にかへりみさる故也かさねて繕写するをまつへし是又言をもて人をつる事なからん事をあふくときに宝暦十三年六月七日舜菴 本居宣長 花押^(註4)

さて、この小稿では、かかる宣長の文学論の構造乃至意義をば姑く措き、それが前提として、宣長が如何にしてこの思想に到達したかを、彼自身の生活と学問に即して出来る限り実証的にその生成過程を跡付けようとするのである。かく、その発生の基盤を解明しておくことは、彼の文学論を正当に理解し且つ評価する上で、必ずや必須の作業であろうと信ずる。「序説」と題する所以である。

II 「歌学び」の展開

宣長の家系、出自、幼少期の状況等を顧みておくことは、彼の後年の巨大な学問体系の全き理会のためには欠くことのできないことであろう。が、それについては既

に先学の解説も存するので、ここでは宣長の「歌学び」の概況について、彼自身の口を通じて考察することしようと思う。即ち「玉勝間」巻二「おのが物まなびの有りやう」において、

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむよろづよりもおもしろく思ひて、よみける、さるははかばかしく師につきて、わざと学問すにもあらず、何と心ぎすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとの、くさぐさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、哥よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて、まなべるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出るばかりなりき、集どもゝ、古きちかきこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき、かくてはたちあまりなりしほど、学問しにとて、京になんのぼりける、さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし、家のなりはひをさへに、うしなひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのために、よのつねの儒学をもせむとてなりけり、さて京に在しほどに、百人一首の改観抄を、人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、余材抄勢語臆断などはじめ、其外もつきつきに、もとめ出て見けるほどに、すべて哥まなびのすぢの、よきあしきけぢめをも、やうやうにわかまへさとりつ、さるまゝに、今の世の哥よみの思へるむねは、大かた心になはず、其哥のさまも、おかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞよの人なみに、こゝかしこの会などにも出まじらひつゝ、よみありきけり、さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのがたてゝよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞ有ける、そはさるべきことわりあり、別にいひてん、云々。^(註5)

と、幼少期から京都遊学を終えて帰国するまでの学問的閱歴を泌々と追想しているのであって、われわれはこの文章によって、この期における彼の学問の成り立ちとその展開の相を、ほぼ誤りなく把握できるのである。而してそれは、(1)幼時から読書好学の念が強かったこと (2)十七八歳頃から和歌に関心を抱いたこと (3)二十歳過ぎ医術及びその階梯たる儒学を学ぶために上京したこと (4)京都で契沖の学を相識したこと (5)契沖学によって新しい歌学に開眼したこと (6)その新しい歌学思想が旧派堂上歌学と相容れなかったこと、等に要約することができよう。これらの事柄は他の諸資料によって検討しても、大凡正確に真実を伝えていることが分る。而して、これらの一つ一つについて具さに考察を加えることは、やがてこの期の宣長学の種々相を明らかにすることにな

ろうが、それについては既に一二私見を述べたこともあり、^(註6)且又与えられた紙幅との関係もあって、ここでは彼の文学論形成に果した素因について簡単に触れておくに止めたい。

先ず、前引「十七八なりしほどより、哥よまほしく思ふ心いできて」という文字は、幼時より諸書を涉猟して言わば暗中摸索の状態にあった宣長が、漸くこの「和歌への好尚」に自らの方向を見出したということを意味する。そして、彼の「日記」寛延二年（宣長二十歳）の条に、

自去年志和歌 今年ヨリ専ら寄此道於心。^(註7)

とあり、彼の歌稿「栄貞詠草」寛延元年戊辰詠和歌の巻頭に、

此道にこゝろさしてはしめて春立心を読侍りける新玉の春きにけりな今朝よりも霞そそむる久方の空^(註8)と載せており、混沌の域にあった宣長の学問への志向は、ここに「志和歌」即ち「歌学び」として自覚的に統一せられたのである。なお、この頃の詠草を集めたものに「栄貞詠草」一卷、歌書から諸説を抄録した歌学ノートと言うべき稿本「和歌の浦」四冊があり、彼の和歌に対する情熱の並々でなかったことを示している。

かかる「和歌への志向」は、単に宣長学の出発点を考定する上で重要なのみならず、彼が医術修得を直接の目的としながら、その京都遊学を真にのみり深き「歌学び」たらしめた最大の動因として、重視せねばならぬと思う。即ち古今集以来の伝統的地京都に対して抱いた宣長の期待は、この「歌学び」の面において最も大きいものがあつたと推測せられるのである。それは、上京後約半歳にして冷泉為村の門人森河章尹に入門してその新玉津島の歌会に出席したり、宝暦六年正月には有賀長川の月次歌会に参加して帰国後宝暦八年頃まで関係を有していた事実や、その間に詠んだ歌が千数百首（宝暦二年354首、同三年311首、同四年297首、同五年265首、同六年162首、同七年46首）にも達すること、またこの期に購入或は書写した書籍の多くが和歌・物語の類で占められていること等に徴しても明らかであろう。

だが、宣長の「歌学び」は上京後程なく伝統的な旧派歌学の厚い壁に突き当らねばならなかったようである。即ち「壬申詠和歌」宝暦二年冬の詠に、

年ころ此道に志ありてたえずよみける言の葉もはかばかしくよしあし見わくる人もなき事をうらみて
同し題（稿者注：浦千鳥）にておもひをのへ侍りける

和歌浦たちよるかたを浪間にそ夜はの千鳥の鳴あかすなる

浜千鳥鳴こそあかせ和歌の浦やたつらんかたもなみのよるよる^(註9)

とあって、彼が京都歌壇に対して思い描いた期待は、早くも破綻を生じたのであつた。しかし、この破綻は彼に

和歌への自信を喪失せしめることになつたのではなく、却って旧派歌学に対する不信乃至懷疑となり、ひいては和歌そのものの本質についての反省と省察に目を向けさせる機縁を為したと想像せられるのである。では、かく旧派歌学と対決せざるを得なくなつた宣長は、如何にしてそれを批判し克服し否定し得るに到つたのであるか。その有力な方法的支柱を与えたのは、前引「玉勝間」の文章に見られる如く、契沖の学に外ならない。彼の旧派歌学に対して抱いた不信は、それが決して不当ではなく寧ろ逆に旧派歌学のいわれなき権威主義こそが否定されるべきであるという認識は、そのまま古書に徴証を求める契沖の文献学的実証主義の当然の帰結と考えられるからである。かくて宣長の「歌学び」は契沖学と相識るを得て著しく変容し進展を見るのであって、彼の京都遊学の最大の成果はこの契沖学との邂逅に在ると言つても決して過言ではあるまい。（なお、この間の具体的詳細については、拙稿「初期宣長学の成立に関する一考察」^(註10)を参看して頂ければ幸いである。）

而して、この契沖と宣長を結びつけたのは、宣長の漢学の師堀景山であつて、宣長は京都遊学の五ヶ年有半を景山の歿するまで——それは又彼の京都遊学の終りでもあるが——親しく教えを受けたのであり、大久保正氏の言を藉れば、

かれ（稿者注：景山）は儒学者でありながら、国典にも素養があり、和歌をたしなむことが深く、たびたび詩会とともに歌会を催していたが、ことに契沖の門人樋口宗武と親しく、契沖の著「百人一首改観抄」を宗武と共に刊行したほどで、契沖の著書を多く蔵してその学問を尊敬し、儒学と和学の両面にわたつて古学思潮の影響を受けていたのであつて、その学問思想が若い宣長に与えた影響感化はけつして軽視し得ないものがあつた。^(註11)

と言うことができ、管見によれば、宣長の文学論の中核をなす思想も或は直接にこの景山に淵源しているのではないかと考えられる節も存するのであるが、それは改めて考察することとして、ここでは宣長の学問に多大の影響を与えた存在としての景山を指摘しておくに止めたい。

ともあれ、この京都遊学は宣長の人と学問に対して、殆ど決定的な影響を与えたのであつて、その成果は帰国後の旺盛な学術的活動において、順次開花し結実してゆくことによって明証されるであろう。

III 歌論書「排董小船」の成立

さて、宣長の京都遊学は景山の死と前後して終りを告げ、宝暦七年十月宣長は郷里松坂に帰り医業をもって生涯の生計を立てることになつたのであるが、それは又彼の古学者としての輝かしい学問的生涯への出発でもあつ

た。そして、早くも京都時代の修学の成果は歌論書「排蘆小船」（菅見によれば、宝暦八年頃成立）によって発現せられることになった。この未定稿と思しき稿本は、宣長在世中も全く世に知られず又宣長自身によっても殆ど語られることのなかったものであるが、大正年間佐佐木信綱博士によって発見され始めて学界に紹介されたのであった。而して、この稿本の出現は、それまで断片的な資料に基づく推測的な域を出なかった宣長学形成過程の考察に対して、一際鮮やかな照明を与えることになったのであり、正しく「それは全く契沖の啓発によって成熟しつつあった在京時代の学問・思想の状況をさながらに結晶した、宣長の青春の記念碑ともいべきものであった。」^(註12)と云っているのである。

しかしながら、この「排蘆小船」にはその成立時期及び事情について必ずしも明確でない点が残るので、その内容を考察するに先立って、書誌的解説を施しておくことが必要であろう。

(i) 著作時期

此書が何時成立したかという問題については、この稿本の発見者たる佐佐木信綱博士が、

旧派歌学に比較的同情の態度があったこと、契沖に対する感激の情の鮮新なること、石上私淑言紫文要領等に屢々見えた「ものあはれ」の語のわづかに述べられたること、これらの点は、本書の作られた年代に対して、ほぼ暗示するものがある。即ち彼が京都在学中契沖の著を精読してから松坂へ帰るまでの間に成ったものであろう。しかして前に引用した一節に、「為村卿にはげざんし奉らず」の語も、ほぼこれが傍証となしう。宣長が廿八歳で京を去った宝暦七年には、為村は四十六歳で盛名の高かった堂上歌人であった。^(註13)

と、著作時期を推定せられて以来、この佐佐木博士の在京中成稿説は村岡典嗣・久松潜一博士等国学研究の権威によって継承支持されて、今や学界の定説と目されているのである。しかし、此書を仔細に検討すると、この在京中成稿説の論拠は極めて薄弱であり、諸々の点から考えて、帰国後精しくは宝暦八年頃執筆せられたとせねばならぬと思うのである。（この間の経緯については、拙稿「排蘆小船の成立に関する私見」^(註14)で稍詳しく論証を試みたので、それに譲ることとする。）

(ii) 成立事情

さて、私は此書の著作時期を宝暦八年頃と推定するのであるが、それは此書が如何なる状況の下で成立したかという、その成立事情を究明することによって一層明瞭となるであろう。

宣長は帰国後間もなく尠くとも宝暦八年二月以降、彼の菩提寺である樹敬寺嶺松院の歌会に関係を有し、やがてその中心となって活躍しているのである。そして、この嶺松院会は彼にとって単なる歌会以上に、広く歌学一般に関する討論の場として、彼の「歌学び」の具体的な

活動の舞台となったと考えられるのである。それは、当時この歌会で歌を詠み交わした同人の多くが、そのまま宣長の古典の講筵に列なっており初期鈴屋門人群を成している事実から、容易に首肯せられる所である。即ちこの同じ年の夏開講した宣長の源氏物語講釈における聴講者（鈴屋本湖月抄末尾^(註15)の記載による）の大部分が、この嶺松院会で宣長と歌の贈答などを行っていることが、「石上稿」によって知ることができ、而も、彼等の名前が「鈴屋門人録」^(註16)の巻首に見えていることは、這般の状況を端的に示すものであろう。

ところで、上の如き観点に立って此書の内容を改めて検討すると、此書が問答体の形式を採っていることや、彼が自らの和歌本質観と共に極めて卑近な詠歌作法などに言及していること、また文中に散見する「予が教へにしたかは」など門人に教え諭すような表現のもつ特異性も、すべて無理なく諒解できるのである。それゆえ、私は此書の成立を、彼が帰国後牛耳を執るに到ったこの嶺松院会における同人等との質疑応答の手控えであろうと、その成立事情を推測するのである。

(v) 形態について

この稿本を親しく調査し紹介せられた佐佐木博士、村岡典嗣教授の解説によって整理すれば、此書の形態は大凡次の如くである。^(註17)

先ず表題には「排蘆小船」とあり、本文の初めに「あしわけ小舟」と記されている、美濃判三十七葉に十八行乃至二十行の細字で記された一巻である。次に、此書の特徴を列挙すれば、(1)宣長自筆の稿本であること、(2)片仮字漢字交り文であること（現行の活字翻刻本は何れも平仮字に改めてある）、(3)宣長自身による見出しの文字が本文の下方に加えられており、総数約八十項目である、(4)頭注があり、それらは諸書からの引用（比較的漢籍からのものが多いことに注意を要する）や補説の類で何れも本文の所説を相補うものである、(5)全体として問答体の形式を襲っているが、独自に項目を立てて述べている所も見られる、等に要約できようかと思う。

※ ※ ※

上の如き成立に係る稿本「排蘆小船」は、本書が何等体系的に整備されていないにも拘らず、否、却ってそれ故にこそ行間に溢れる若々しい宣長の思想が、言わば肉声をもってわれわれに語りかけてくるという点で、正に宣長の処女作たるに相応しい。而も、当面の課題である彼の文学的思想は、早くもここに主要な骨格を形成し、彼の確信となっていたことを知るのである。以下その中核的思想について、瞥見することにしよう。（引用文の頁数は、岩波版「本居宣長全集」第三冊のそれである。）

先ず、彼は此書の冒頭に言う、「哥の本体、政治をたすくためにもあらず、身をおさむる為にもあらず、たゞ心に思ふことをいふより外なし」（P.6）と。即ち和歌は政治・道德等の外的羈絆を脱却した「心の表現」以外

の何物でもない、その自律性を主張するのである。然らば、「たゞ心に思ふこと」を表現に移せば歌と言っているのであるか。そこで彼は、「されども文字の数をさだめず思ふまゝにいふは、哥にあらざ、つねの言語也、ほとひやうしよきを哥とす」(P.6)と述べて、一般言語表現とは異なる和歌独自の領域を規定する。そうして彼は和歌を次の如く定義するのである。

もと和歌の本体は、政道のたすけとするものにあらず、只思ふことを、ほとよくいひのぶるまでのこと也、(P.80-1)

それでは、「思ふこと」であれば、如何なる事でも歌に詠んで差支えないのであるか。宣長はそれでも構わぬと言う。即ち、

姦邪の心にてよまば、姦邪の哥をよむべし、好色の心にてよまば、好色の哥をよむべし、仁義の心にてよまば、仁義の哥をよむべし、たゞたゞ哥は偏にかたよれるものにてはなきなり、実情をあらはさんとおもはば、実情をよむべし、いつはりをいはむとおもはば、いつはりをよむべし、詞をかざり面白くよまんとおもはば、面白くかざりよむべし、只意にまかすべし、これすなはち実情也、秘すべし秘すべし、(P.4-5)

と、「思ふ心」を無限に拡大して而もそれを肯定する。しかし、かかる立言の背後には宣長の鋭い洞察が隠されているのであって、その「思ふ心」の「実情」が深く「人情の常」に根ざして動かぬことをはっきりと見抜いているのである。そしてここに、われわれは単なる論理と文芸の論理とのあざやかな差異を認めることも可能であろうが、それはともかくとして、彼は引続いて次のように説明する。

心の中には邪悪をあくまでいたきながら、正善の意なる哥をよむ、これ偽にして偽にあらざ、人情のしからしむる所也、其故は、心中の悪を恥る故にかくしてはば、詞をかざりてよむ、これ人情の常なり、

(P.9)

と、「思ふ心」がひとたび和歌という芸術的表現を取ろうとするとき、そこに働く契機としての「実情」——言わば芸術的意欲——を、「人情のしからしむる所」という極く自然な心の働きに還元するのである。

それでは、この「人情」の本体を彼はどのように把えていたのであるか。

さて人情と云ものは、はかなく児女子のやうなるかたなるもの也、すべて男らしく正しくきつとしたことは、みな人情のうちにはなきもの也、正しくきつとしたことは、みな世間の風にならひ、或は書物に化せられ、人のつきあひ世のまじりなどにつきて、をのつから出来、又は心を制してこしらへたるつけ物也、もとのありていの人情と云ものは、至極まつすぐにははかなくつたなくしどけなきもの也、(P.58)

と、あらゆる作為・虚飾を排除してそこに現われる赤裸々たる相において、人間性の真実を認識しようとするのである。そして、「すべて男らしく云々」ということは「これ又近世武士の氣象、唐人議論のかたぎ」(P.58)に外ならないのであって、当時の支配階級たる武士の理想乃至儒教的教義は、真の人間性とは離れて程遠いものであると厳しく否定するのである。そして、そのような作為・虚飾である「こしらへたるつけ物」を払拭したところに「人情」の本来が現われるというのである。

而して、和歌こそは、かかる「人情」のありのままなる表現であることによって、「詩経」の伝統を失った漢詩に優越し、和歌に恋を詠んだ歌が多い所以であると主張するのである。即ち、

歌は情をのぶるものなれば、又情にしたがふて、しとけなくつたなくはかななるへきことはり也、これ人情は古今和漢かはることなき也、しかるにその情を吐き出す吟の、男らしくきつとして正しきは、本情にあらずとしるべし、孔子刪詩三百篇、おほむねしどけなきことのみ多かり、されば四角なる文字を学べはとてしどけなきとて何ぞ和歌をそしらんや、いと人情にうとくこそ覚ゆれ、(P.60-1)

というのである。

ところで、かかる和歌と人情の関係は、和歌成立の基盤を一応説明できるとしても、それだけでは和歌を文芸たらしめることはできない。何故なら、それだけでは単なる表現に止まって芸術的表現とはなり得ないからである。では、宣長はその芸術性の具体的な契機を何に求めたのであるか。

哥の本然は何事にも、心に思ふほとのことよみ出られずと云ことなし、されども風雅を向ふ道なれば、不風雅をきらひて、詠ぜぬまでのこと也、(中略)只々此道は風雅をむねとし、秀逸をよみ出んことを願ふべし、理非議論になつむへからず、(P.43)

と、そこに「風雅」の理念を持ち来たるのである。而も宣長によればこの「風雅」とは既に与えられた規範なのであって、理非を超えた超越的存在として把えられているのである。思うにこれは、彼の和歌の史的研究から帰納した確信であろうが、同時にその時代の「雅俗意識」の影響を知らず識らずに受けていたとも考えられるのである。それは、次の文章によって明らかであろう。

このいはれいかんとなれば、情も悉皆古昔に立かへり、古人になりて、いにしへの風雅の境界にならんことを求る也、その古へをうらやみまなぶは、いかなるわけぞと云ふに、まづ古は詞も情もすなほにやさしく雅なり、後世にいたるほど、詞も情もきたなくなりもてゆく也、されは和歌は、古への雅意雅言をうしなはず、後世までも上代にかはらぬ面目也、(P.65-6)

と、和歌の和歌たる所以を「風雅」に求めていることが知られるのである。而して、彼はその風雅的和歌の典型

を古今三代集に、又その極致を新古今に求めて、作歌の意義は力を竭してその風雅の世界に迫るところに存すると言うのである。ここにおいて彼は、前の「人情」こそが和歌の根源であるという主張によって中世的、近世的呪縛から解放されたにも拘らず、洵に忠実に撰集和歌の伝統即ち「風雅」の中に埋没してゆくのである。宣長の和歌観のもつかかる二面性については、まだ多くの問題が残るのであるが、いずれ彼の文学論そのものを論ずるとき、改めて考察したいと思う。

ともあれ、この「風雅」は、「すべて此道は風雅をむねとして、物のあはれを感じる処が第一なるに、」(P.98)という文によって象徴されるように、彼の「ものあはれ論」と深く係わりあっていることを予想させるのである。(以上、「排蘆小船」について宣長の和歌観の一端を窺ったのであるが、此書については他に、和歌史論・契沖観・伝授批判・言語観・万葉論・神道観等々それぞれ重要な事項であるが、すべて省略に従うこととした。)

IV 「紫文要領」以前

われわれは前節において宣長の歌論書「排蘆小船」について、主として彼の和歌観の特色に焦点をあてて考察し、そこに人情に基く主情主義的和歌始源論と、その文芸的達成を撰集和歌の風雅に規範を仰ぐ古典主義的和歌観とを見出した。而も、それらを貫く方法的支柱をなしたものが、契沖学の文献学的実証主義であったことは言うまでもない。そして、これらの思想はやがて彼の「ものあはれ論」の主要な骨格をなすのであるが、ここではその「紫文要領」に到るまでの約五箇年における宣長の学的活動について概観しておこうと思う。それは、「紫文要領」成立の必然的過程を或程度まで実証することにもなるであろう。

(i) 作歌活動

宣長が松坂に帰った翌年宝暦八年から、嶺松院歌会の同人となりやがて指導的役割を果すに到ったことは既に触れた如くであるが、それは彼の歌稿「石上稿」によってもほぼ裏付けることができる。即ちこの「石上稿」の主要部分が嶺松院会の兼題或は当座の詠で占められているからであり、宣長が如何にも楽しげに而も自信をもって作歌活動に従っていた行様がよく知られるのである。参考までにこの期に詠んだ歌数を記せば、○宝暦八年 157首 ○同九年 207首 ○同十年 144首 ○同十一年 113首 ○同十二年 139首 ○同十三年 369首、となり、宣長の作歌に対する情熱が依然として旺盛であったことを示しているのである。

だが、歌人として宣長を見た場合、彼の歌論が透徹した牙えを見せているのに反して、やはり諸家の指摘する如く、新古今の亜流か精々草庵集風を一歩も出ておらぬ

ことは、否定できないようである。

(ii) 古典講義

宣長は歌人としても孤り作歌を楽しむという風でなかったように、彼の古典研究も亦孤独者のそれではなかった。それは、この期に始まった各種古典の講義という事実によっても徴することができる。即ち彼の作歌活動が嶺松院等の歌会を母胎としていたように、彼の古典研究の主要な基盤をこの「講義」に求めることにも亦可能であろう。何故なら、宣長を取巻く門人等との質疑応答は必ずや彼の研究・思索に容与をなしたであろうし且又彼の新しい知見は逸早く彼等聴講者の前に提供せられたと想像せられるからである。(因みに、彼の著述が犀利な論理と共に実に懇切周到な表現を具えている理由の一半は、かかる講義の自然な影響に因るのかも知れぬ。)以下、この期の具体的な講義について略述する。

(a) 源氏物語

宝暦八年夏に開講せられた源氏物語の講義は、紫文要領の成った年の宝暦十三年五月には竹河巻まで進み、余す所宇治十帖のみである。而して彼の文学論成立の重要な契機をなす「螢巻」については、宝暦十年の恐らくは春から夏までの間に講義せられたと推測されるのである。なお、源氏物語全巻の講義(第一回)が終ったのは、明和三年六月のことである。

(b) 伊勢物語

宝暦九年三月開始、同年十二月終了。

(c) 土佐日記

宝暦十年一月開始、同年五月終了。

(d) 枕草子

宝暦十年五月開始、翌十一年五月中廢。

(e) 百人一首改御抄

宝暦十年十月開始、同年十二月終了。

(f) 万葉集

宝暦十一年五月、枕草子に代って開講、宝暦十三年二月には卷三を終了。(全廿巻を終了したのは安永二年十二月である。)

以上がこの期における宣長の古典講義の大要であるが、(b)の伊勢物語以下の諸書は源氏の講義と平行して行われたもので、彼の学的関心の一端を示すものと言えよう。なお、彼が医業の傍かとも熱心に講義を続けた熱意もさることながら、宣長の学問がこの講義という土壌の中で漸次生育して行ったことの意義を忘れてはならないと思う。

(ii) 著述その他

この期の著述類は、前記「排蘆小船」を除けばさして多くはなく、而も概ね小冊子に過ぎぬけれども、宣長の形成過程を知る上では示唆する所も大きいと言わねばならない。

(a) 安波禮辨・紫文譯解

この小冊子は、「戊寅(稿者注:宝暦八年)五月三日発

起」と記されていることから、彼の源氏物語開講と前後して起稿せられている点でも注意すべきであろう。

前者は旧事記以下の古典から「あはれ」という語の用例を摘出してその語義の検討を試みたものである。而して、この「あはれ」という語に着目して、それに新しく芸文論の意味を付与しようとしている点で、後の「ものあはれ論」に到る一過標として、宣長の文学論形成を考察する上で極めて注目すべき文献である。後者は、源氏物語の用語約三十八語について精確な釈義を施したもので、後年の「玉の小櫛」の解釈説と相通ずる趣が窺われて興味深いものがある。

(b) 古今選

これは著述とは言えぬかも知れぬが、主として歴代勅撰集から、彼が秀歌と思う歌を抜き出して編纂したものである。総数1357首を五巻に分類して収めており、宣長の歌風の好尚を知る上で有益である。宝暦八年正月二十日に稿を起して同年三月二十二日に終わっている。因みに、「石上稿」にその年の春の詠として、

二十一代集をつきつきよみて思ひつゝける

言のはのうつりもゆくかよゝにふる人の心やしくねなるらん^(註18)

と載せており、恐らく此書編纂の折の感概を詠んだものであろう。

(c) 阿毎菟知辨

宝暦十一年三月成る。「天地」の古訓を考証したものである。^(註19)

(d) 石上集一之巻

宝暦十二年二月編集。これは彼の自撰歌集で、「自撰歌」「鈴屋集」に到る過程を示すもので、歌人としての宣長を考える上で意味がある。

以上が今日知られている、この期の著編述書目の主なものである。なお、彼がこの期に購入或は書写した書目の概要^(註20)も知ることができ、それも亦彼の学問的関心を窺う一助となるであろう。

※ ※ ※

さて、われわれは帰国後紫文要領に到るまでの宣長の学的活動を、作歌・講義・著述等を通じて概観したのであるが、この期の意義を要約すれば、それは和歌から物語へと彼の「歌学び」の内容が拡大展開してゆく所に在ると言えよう。先ず、「古今選」の編述は彼の和歌史観の具体的な表明であり、それまた「排蘆小船」の「歴代変化」に見られる和歌史論と表裏なし、此書において彼の和歌観は見事な開花を遂げ一応の成熟をみたとすることができる。而して、その和歌観は、それが風雅を理想とすることによって、必然的に源氏物語を中心とする王朝物語文学に新しい意味を発見させ、やがて彼の主要な研究対象となってゆくのである。

なお、ここで一言蛇足を加えれば、この和歌から物語への展開は、決してAからBへと研究乃至関心の対象が

移行することではなく、AからABへ即ちAからA'(=AB)という風に、順次新しい対象を包摂してゆくという方式であることを意味する。この事実は極めて自明のことではあるが、従来ともすれば見落されて、宣長学の正当な理解を妨げてきた一因をなしていたと思われる。

V 結 語

日本文学評論史上画期的業績と目される本居宣長の文学論（「ものあはれ論」）について、この稿では、彼が如何なる状況の下で又如何なる方法的自覚においてその思想に到達したかを即ちその生成過程を、主として彼の学問的関歴を顧みることによって考察を試みたのである。而してその結果、彼の超凡の資質もさることながら彼の和歌に対するあくなき熱情がその文学論形成の第一の動因であることを確認し、次いで、その和歌探求の理論的方法を与えたものが契沖学であることを指摘した。これを宣長の「歌学び」に即して言えば、彼が「詠歌」（和歌の制作）を主目的とした彼の歌学びが契沖学による新しい「歌学」（和歌の理論）へと拡大展開したことを意味し、京都修学時代はほぼこの「歌学びの展開」の時期に相当する。そして、その研究と思索の成果は歌論書「排蘆小船」において一応開花し、主情的風雅的和歌観が確立するのである。それはまた、旧派歌学の牽強附会的な「家の説」の虚妄を鋭く批判否定すると共に、古今集に始まる撰集和歌の道統を新しく受く継ぐことを意味したのである。

而して、この撰集和歌の根底に流れるものとして発見した「人情」と「風雅」は、必然的に彼をして王朝物語を代表する源氏物語へと導いてゆくことになったのである。そのゆえは、源氏物語こそは彼の理想とする主情的風雅なる人々の「あはれ」なる生活の種々相をさながらに顕現した作品に外ならなかったからである。これを彼の「歌学び」から見れば、彼の「歌学」は純粹に和歌を対象とするところから、「物語」を包摂して一層その領域を拡大したことを意味するのである。

而して、この源氏物語の「あはれ」を具さに検証することによって、彼は自らの確信である和歌観が単に和歌の世界に局限されることなく、普く物語一般にも妥当することを発見したと推測せられるのである。そして、それを揺がぬ確信としたものは、恐らく「螢巻」の中の物語論の精確なる分析と理會に因るものとして、その決定的な契機を考えることができようかと思う。

ともあれ、あらゆる秀れた思想がその人の生き方と深く係わるという意味で、宣長の「ものあはれ論」もまた例外ではなく、その文学論を解明する上で、かかる小稿も幾許かの意義を有すれば、と思う次第である。

〔後記：文中の引用文はなるべく出典に忠実であらうとしたため、句読・清濁・仮字遣なども殊更に改める

ことをしなかった。また紙幅の関係から極度に圧縮或は削除を加えたため、叙述に繁簡の差が甚しく頗る不体裁になったことをお断りしておきたい。]

〔註〕

- (1) 和辻哲郎著「日本精神史研究」所収<「もののはれ」について> (P. 231)
- (2) 本居清造編「(増補)本居全集」首巻, 所収, 「寛政八年」(P. 30) の条参照。
- (3) 「説林」(愛知県立女子大学) III 所収「翻刻道磨宣長問答」<「雑疑問」参照。
- (4) 岩波版「本居宣長全集」第三冊 (P. 461)
- (5) 岩波版「本居宣長全集」第一冊 (P. 135-6)
- (6) 拙稿<「初期宣長学の成立に関する一考察」(名古屋大学国文学研究室論集 I) 所収, <「草庵集玉箒の成立」>「国語国文学 (名古屋大学)」No. 1, 所収, 等。
- (7) 「本居宣長稿本全集」第一輯 (P. 18)
- (8) 岩波版「本居宣長全集」第二十五冊 (P. 5)
- (9) 同上書 (P. 101)
- (10) 〔註〕(6) 参照。
- (11) 大久保正著「江戸時代の国学」(P. 196)
- (12) 同上書 (P. 200)
- (13) 佐佐木信綱著「増訂賀茂真淵と本居宣長」(P. 248)
なお, これと全く同一の見解が, 同氏著「国文学の文献学的研究」(P. 178) にも見えている。
- (14) 「国語国文学 (名古屋大学)」No. 15 所収。
- (15) 「本居宣長稿本全集」第一輯 (P. 357)
- (16) 「(増補) 本居全集」首巻, 所収。
- (17) 佐佐木信綱著「増訂賀茂真淵と本居宣長」所収<「排蘆小船と宣長の歌論」>, 村岡典嗣編岩波版「本居宣長全集」第三冊<「凡例」>参照。
- (18) 岩波版「本居宣長全集」第二十五冊 (P. 189)
- (19) 佐佐木信綱著「増訂賀茂真淵と本居宣長」(P. 182) 参照。
- (20) 「本居宣長稿本全集」第一輯, (P. 72-6) 参照。